

図 1 Frequency of asymptomatic bacteriuria in school ages

全く消失したもの 37/86(43%)である。この成績より我々は無症候性細菌尿に対しても尿路感染症の慢性化を予防するためにも積極的な治療を行い起因菌の消失をはかるべきと考える。

<症候性細菌尿の頻度>

S. 52年度、川口済生会病院小児科、埼玉医大小児科外来で症候性尿路感染症として取り扱った患者の、年令的、性的分布は表 4 で示した。両施設ともほぼ同数の外来総数である。尿路感染症の発症年令、性差は 4~5 才より 10 才までの女兒に多発する極めて類似した傾向がみ

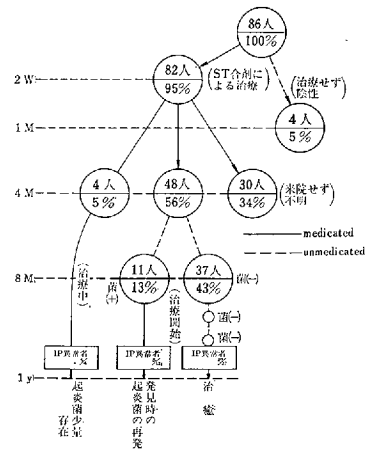


図 2 無症候性細菌尿の followup 成績
S. 52年度 (川口市小中学生徒)

られた。この成績は先述した無症候性細菌尿の年令差、性差とは異なる成績である。

尿路感染症の一年間の頻度は 1.38%, 0.72% であり男女比べてみると 0.8 : 2, 0.5 : 1.0 と女兒に多い。これら尿路感染症全例に IVP を施行し腎尿路系の奇型との関係を見ると、2 才までの乳児尿路感染症では 70% に Hydronephrosis などの尿路奇型を認めた。幼児、学童では、15% 内外に重複腎盂ノ尿管、水腎症などの奇型、腎盂膀胱腎逆流現象を認めた。

これらのことにより、小児期尿路感染症発生には尿路系奇型の関与が高いことが明らかである。

厚生省「尿路感染症」調査研究班研究会報告

都立清瀬小児病院腎内科 伊藤 拓
 長谷川 理
 青才 文江
 中原 千恵子
 泌尿器科 川村 猛
 長谷川 昭
 星 長 清 隆

1. 小児尿路感染症と慢性腎不全の関連について

私共が経験した 53 例の腎不全患児について尿路感染症

との関連について検討した。

Glomerulopathy, vascular nephropathy 計 32 例中、

慢性腎盂腎炎を伴ったものは1例であるが、renal hypoplasia 9例中7例、malformation or dysfunction of UT 12例中全例に慢性腎盂腎炎の合併が認められている。即ち、慢性腎盂腎炎は先天性腎尿路奇形、又は機能異常に高率に合併し、その悪化に大きな影響を及ぼすが、VURを伴う症例を含めても腎尿路系の奇形を伴わない慢性腎盂腎炎で、あるいはその合併で腎不全に至る症例は少なくとも小児期では少数であると考えられた。以上の結果より腎尿路系の奇形をもった患児では合併する尿路感染症の治療がその予後に大きな影響を与え、その早期発見、適切な内科的、外科的処置が腎不全の進行を阻止、あるいは遅延せしめ得るのに重要と考えられた。

2. 腎移植患児における尿路感染症の検討

腎移植における免疫抑制剤療法が移植腎生着の不可欠の条件である一方、患児の免疫防禦機転の低下が易感染性をもたらす事もよく知られている。そこで私共は特に問題となる尿路感染症について16例の移植患児を対象として2, 3の検討を行った。

移植後、尿路感染症合併頻度は移植後35ヶ月から2ヶ月の間に16例中8例に計36回の尿路感染を認めており、下部尿路に異常のある3例では平均9.3回(3.1ヶ月に1回)と高頻度に再発を認めているが、異常の認めない13例では平均0.6回(32ヶ月に1回)であった。起炎菌の種類は Klebsiella, E. coli, Enterococcus が主たるものであるが、下部尿路に異常のある群では、特に混合感染が多い傾向が認められた。

以上の結果より、移植前患児の下部尿路異常の有無が術後尿路感染症の合併の大きな因子となり、上部尿路感染への進行による腎障害、全身感染症への進展の可能性を考慮するとこのような病変を有する患児では腎移植前に可能な限り形成術により病変の除去を計ると共に将来 Conduit 等の尿路変更術の併用も考慮せねばならないと

考えている。

3. 長期透析患児の膿尿と尿路感染症の関係について

長期透析患児における尿路感染症及び無菌性膿尿について2, 3の症例について以下の検討を行った。

原疾患別では Glomerulopathy 15例中1例に、hypoplasia, malformation or dysfunction of UT の8例中4例に経過中尿路感染症が認められた。尿中白血球数と尿細菌数の関連では膿尿を認めた10例中5例に細菌尿を認めており、したがって15例中5例(27%)が無菌性膿尿であった。無菌性膿尿の原因については十分な理解は得られていないが、ネフローゼ症候群においても乏尿期に膿尿が高頻度に認められる事から、尿量減少が一つの因子である可能性があるが、今後更に尿中白血球の百分率その他の検索が必要と思われる。

以上、透析患児においては高い頻度で膿尿が認められる事、尿路感染症の合併は原疾患と強い関連がある事を報告した。

4. 幼稚園児尿スクリーニングについて

346名の幼稚園児について尿スクリーニングを行った結果、1名に無症候性血尿、1名に無症候性細菌尿が認められた。少数の検討ではあるが同様な他施設での検討 data よりも、小児尿スクリーニングは学童のみでなく、幼児においても必要な検診の一つであると考え、このようにして発見された無症候性細菌尿についての病的意義、治療方針についてはなお一定の見解は得られていないようである。私共はこの点について2, 3の検討を行いその結果について報告した。

即ち、このような患児については器質的疾患のみでなく機能的障害(潜在性排尿機能障害)についても十分な検索を行い、治療方針をたてる必要がある事を強調した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 小児尿路感染症と慢性腎不全の関連について

私共が経験した 53 例の腎不全患児について尿路感染症との関連について検討した。